

「森から世界を変える REDD+プラットフォーム」  
第三回総会

2016年12月16日（金）13:00～14:30  
国連大学 ウ・タント国際会議場

**1. 開会挨拶**（森林総合研究所 REDD 研究開発センター長 平田泰雅氏）

- ・昨年（2015年）COP21でパリ協定決議、今年（2016年）11月4日に発効、100カ国前後の国が批准するなど2020年に向けREDD+は急速に進んでいる。
- ・COP13以降、REDD+に関する交渉は紆余曲折があり、なかなか前には進まなかったが、現在は技術的問題をある程度解決し、今後は資金の課題解決に向けた作業が2020年に向けて行われると考える。
- ・我が国がどのようにREDD+にコミットできるかということでREDD+プラットフォームが設立され関心のある団体に参加頂き2年間活動を行ってきた。本日は、今年度の活動の報告を中心に議事を進める。忌憚なき意見をお願いしたい。

**2. 事務局報告**（JICA 宍戸審議役兼次長）

【2016年活動総括】

- ・REDD+プラットフォームはメディアにも取り上げられる機会が増大した。
- ・「地方でイベントをやって欲しい」という要望を受けて、名古屋でイベントを開催した。
- ・クレジットに関心のある企業、森林保全を事業の対象にしている企業との連携を重要視してきた。
- ・対外発信としてUNFCCC/COP22でサイドイベントを開催した。

【実行委員会報告】

- (i)「イベントの重複、テーマの偏りがあるのではないか」との指摘があり、分科会毎に事前に調整することになった。
- (ii)「テーマごとにフォーカル機関を指定し、民間企業を支援する体制を構築できないか？」という意見があったが、現時点での対応は難しいということになった。
- (iii)「JICAの民間連携など他の森林に関するスキームを紹介して欲しい」との要望があり、今後対応していくことになった。

【総会での決定事項】

- ①運営方針の改訂：個人加盟、有識者を追加
- ②関係省庁の実行委員会へのオブザーバー参加
- ③加盟団体の発表に対する謝金・旅費の支払いはなし。  
（有識者の講演などへの謝金・旅費支払いは個別に検討する）

- ・参加者との質疑応答  
（質問）

謝金、旅費の支払いについてプラットフォーム主催のイベントのみなのか。②COP21の際に設立された「新たに開設された非国家主体気候変動活動（NAZCA）」登録について国際的な情報発信の観点から事務局に相談したい。

(回答)

JICA 宍戸次長：謝金・旅費支払なしの扱いはプラットフォーム主催イベント（勉強会や分科会など）のみで、他団体が中心に開催するイベントに関しては対象外。NAZCAについては実態をよく把握していないので、情報を得次第検討し実行委員に相談する。(コメント)

個人加盟について、このプラットフォームの大事な目的は情報共有なので個人加盟は賛成。実行委員会に林野庁や経産省が加わることは、国際会議等での交渉など最前線の情報を共有いただけるということで、是非承認いただきたい。

- ・以上の質疑後、運用方針の改訂について、賛成多数で承認された。

#### 【2017年の実行委員・分科会団体】

- ・以下の事務局提案について、総会参加者の賛成多数により、承認された。

##### 【実行委員】

兼松株式会社

経団連自然保護協議会

国際航業株式会社

公益財団法人国際緑化推進センター

コンサベーション・インターナショナル・ジャパン

公益財団法人地球環境戦略研究機関（IGES）

国立研究開発法人森林総合研究所

独立行政法人国際協力機構（JICA）

##### 【分科会】

ビジネスモデル分科会

国際航業株式会社

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社

情報発信分科会

独立行政法人国際協力機構（JICA）

ナレッジ分科会

国立研究開発法人森林総合研究所

### 3. 分科会報告

#### (1) ナレッジ分科会（森林総合研究所 REDD 研究開発センター長平田氏）

- ・2016年度活動報告と今後の活動予定。2017年2月2日イイノホールで開催予定の国際公開セミナーではアカデミックな面から REDD+活動を行っている学識経験者を招へいする予定。
- ・2017年度はナレッジセミナーを2回、REDD 研究開発センターと REDD+プラットフォーム共催シンポジウムを例年どおり海外から専門家を招いて開催する予定。

#### (2) 情報発信分科会（JICA 森永特別嘱託）

- ・2016年度活動報告（オフィシャル特派員、一般向けのパンフレットをエコプロで配布）
- ・オフィシャルサイト訪問者数は6月と9月に増加。エコプロ報告、パッケンマックンによる REDD+解説シリーズでオフィシャルサイト訪問者が増える見込み。
- ・2017年度はユースサポーター（特派員）の更なる活用を検討。

### (3) ビジネスモデル分科会 (三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング矢野氏)

- REDD+は COP21 にて技術的検討はほぼ終了し実施フェーズへ移行。さまざまな REDD+スキームが動き始めているなか、途上国側とのコベネフィット、グリーンエコノミー型 REDD+を検討する。
- 計画段階から民間の参加が担保されるような事業組成を視野に入れることが重要になることを踏まえ、9月28日に勉強会を開催した。当日の主な議論・意見は次のとおり。  
①途上国の状況を踏まえつつ、民間企業が有する技術や経験を共有する、②企業単独で実施が困難な調査や事業については、官民連携で協力する、③企業のマッチングや情報共有を行う場が必要。
- 来年度は国際的な REDD+の動向に関する情報の共有、各社によるビジネスモデルの検討、ビジネスマッチングについて JICA と連携を密にしつつミャンマーなどを対象に事業計画を検討する。

## 4. セミナー「COP22 と今後の排出量取引の動向について」

(三井物産戦略研修所/ 国際排出量取引協会ボードメンバー 本郷尚氏)

### <<発表要旨>>

- COP22 は、「決める会合」ではなく（排出量取引について）特段重要なことが決まったわけではない。パリ協定第6条に明記されている排出量の国際移転を行う際のルールについてタイムラインは決まったが、内容についての実質的な意見はなかった。2018年にガイドラインを完成させることになっているが、EU交渉官などとの意見交換をしたところ間に合うのか疑問がでてきた。例えばEU交渉官は「COPの場で公式的に「国際移転が必要」と言っている国はない。Article 6を早く合意させなければならない需要はない」などと、交渉戦術かもしれないが、言っている。
- 排出量取引について国連のルール作りは進んでいないが、現場レベルでは異なる。中国では7つの地域でパイロット事業が進み、来年の下期から全国で実施できるよう準備中。中国は国内排出量のほか、オフセットクレジットの輸出は考えているようだ。輸入は考えていない。
- アメリカでは政権交代で連邦レベルでは排出権取引についてはネガティブな方向に動いていくと思われるが、カルフォルニアなど州レベルでみると排出量取引は着実に動いている。カルフォルニアの排出量取引は政治主導で始まったものだが、カナダ・ケベック州など州レベルの連携は産業・エネルギーなど経済の実態に合ったものになっている。
- REDD+はメキシコが一つの鍵になっている。メキシコからカリフォルニアへの排出量の移転が2015年に予定されていたが、未実施。カルフォルニア州制度の場合、プロトコルはVCSなどのコンサルタント会社が州に提案し、州が削減量を確認・承認すると登録簿に掲載され、州のクレジットになる仕組みとなっている。カルフォルニアで REDD+クレジットを開発する場合、カルフォルニアで使えるプロトコルを開発し、それを州が承認し、登録簿を準備することが必要。
- メキシコ、カナダ、米国では国境を越えた排出枠の移動があるが、輸出した国と輸入した国の国全体のインベントリー上の調整はどうするのかはまだ決まっていない。
- EU ETS (EUの排出量取引) は2005年に始まり順調に動いていたが、サブプライム問題で需要が落ちた。加えて途上国からの CDM クレジット (CER) が大量に輸入されたため供給過多になり価格は急低下したままになっている。EUは排出量取引制度を域内での排出量削減のための重要な政策ツールとして位置づけているので、再活性化を図る計画。対策としては次のとおり。①2019年まで各国が保有している排出枠の入札を停止する。②一

方で、2020年以降、再び、大量に排出枠が出回ることになるのでその対策を考えなければならないので、市場介入基金（マーケットスタビリティファンド）で余剰分を吸収する。こうした流動性をコントロールすることで価格の回復を図る。また、2030年削減目標に対しEUはオフセットクレジットを使わないことを明言。ただしEUが2030年目標を引き上げた場合、CDMあるいはその先のSDMを使わないとは言っていない。EUの需要が期待できるか否かは2020年の削減目標の見直しにかかっている。

- ・米国はトランプ政権となり、今後の政策は現時点ではよく見えないが、気候変動対策を行わなくてもCO<sub>2</sub>排出量は減っていくシナリオが予想されている。石炭火力比率が下がってきているが、オバマ大統領のCO<sub>2</sub>規制によるものではなく、低価格のシェールガスの普及により石炭が価格競争力を失ったことが大きな理由。連邦レベルで、各州の排出量取引を後押しする効果が期待されていたのが、クリーンパワープランだが、トランプ氏は反対しており、将来実施されない可能性がある。

- ・日本とメキシコでJCMを締結した結果、カルフォルニア、さらにはカナダと間接的な枠組みができたと言えるがヨーロッパの市場からはあまり注目されていない。

- ・韓国は排出量削減目標はBAU比37%削減だが、なかなか減らないので、10年間で4~5億トンの国際的なオフセットクレジットが必要になる可能性がある。国際的なクレジットを使うことにしており、プロトコルはまだ決まっていないが日本のJCMを勉強しており、二国間クレジットを作る可能性はある。しかし、Human resourceなど規模が違うので日本と同じことはできないので、日本のJCMとの連携/相乗りするかを（本郷氏は韓国に）提案した。

- ・オーストラリアは政府がファンドを準備し削減量を入札により買う制度を取っているが、この制度はエネルギーの価格が高く政府にお金があることが前提なので、エネルギー・資源価格が低迷している現在は維持困難と言わざるを得ず、企業にキャップをかけるしくみにシフトしようとしている。

- ・タイはBAU比20%の削減目標に対し更に5%削減目標を上乗せする可能性がある。5%分の目標達成に他国からのオフセットクレジット利用を想定しており、この場合には20%削減目標には影響ないことになる。

- ・国際航空部門でも排出量取引は活用される。2020年でCO<sub>2</sub>排出量はピークになると思われるが、航空の輸送量は増えていくので航空機の燃費規制を検討中。それでも排出削減目標達成は難しいので、①バイオ燃料を使う、②オフセットクレジットを使うことで目標達成を図る、ことが考えられる。しかし、①はコストが高く需要量を賄うことが難しいので②が現実的なシナリオになっている。②のクライテリアも合意されているが、具体的にどの制度が利用かの指定はできていない。REDD+クレジットは最有力というコメントもあるようだが、他のクレジットと同じスタートラインにある。

- ・途上国からICAOに輸出した場合途上国の排出量をどのように調整するか、というダブルカウンティングの問題がある。REDD+でも同じで、民間スタンダードのクレジットは途上国のインベントリー上の管理とは別になっており、それをどう評価するか、という課題があるように思える。

- ・Article 6のガイドラインは2018年に決めることが予定されているが、遅れる可能性もあるので、ICAOとしてはそのギャップをどう埋めるのかが問題。UNFCCCの議論に固執すると開始が遅れてしまう。

<<質疑応答>>

- ① NDCの見直しについて各国の意思に任されているが、世界的な気候変動に対する危機感から見直されることはあるのか。
- ②REDD+は現時点では途上国の目標達成のための資金集めツールか。

本郷氏：①について、NDC提出時には数値について交渉が行われる可能性もあったので、目標は実現可能性の高いものになったと理解。パリ協定では見直しが想定されている。また、初めからNDCの達成にオフセットクレジットが必要だと公式的に言う国はない。ただ、現実的には、日本、韓国、オーストラリアは必要だろう。②について現時点ではREDD+はファイナンス/グラントと考えるのが無難かとみている。将来ネットベースでクレジットが必要な国があるとすれば、今の仕組みでは限界があり、大量のクレジットを生み出すしくみが必要。大量にクレジットを供給する可能性があるのはREDD+かCCS（二酸化炭素地中貯留）。この二つは大きな議論になってくるので数年先を考え準備しておくといい。

ICAOについて

- ①REDD+取扱いで大きな削減量と不確実性の問題があるが、特に不確実性のところで議論があるのかないのかを教えて欲しい。
- ②ICAOの議論の場で具体的に各国の代表から意見が出ているのかどうか教えて欲しい。

本郷氏：（不確実性について）クライテリアを作っている段階であり、細かい議論にはなっていない。エリジブルクライテリアの中にはpermanenceがあり、REDD+における永続性を心配していることが背景と思う。ダブルカウンティング/インベントリ-の関係もあり国が保証するしくみになるのが理想的なので、その国が責任を持ってやっていくかが問われるのではないかと思う。今後、クライテリアに基づいて議論・判断するグループが設けられ、そこで推薦リストが作られることになっている。合意するには相当な妥協が必要。不確実性についてはその国が保証すればいいが、難しい課題でもあるので、政治的に各国がどこまで妥協するか不透明である。大事なことは航空業界の発展なので、インクルーシブな実施に向けた検討が必要。

## 5. 閉会あいさつ